

# 第45回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

## 中学校3年生の部 最優秀賞

### 人の性質

川湯中学校 神田 幸成さん



「こんな人生があるのだろうか。これがこの本を読んで、最初に感じたことだった。本のタイトルは「人間失格」、これだけでも相当インパクトの強い作品だ。内容もとても重く人間の本性が詰め込まれている感じがした。そして、その重く奇妙な主人公の人生が私をこの本の中に引きずり込んでいった。

この本の主人公である葉蔵は恥の多い生涯を送ってきた。人間の生活というものが見当もつかないらしい。

幼少期の彼は空腹というものがさっぱりわからなかった。大いにものを食べるが、空腹感からものを食べた記憶はほとんどないという。とても信じられないような奇妙な話である。さらに、人間をとんでも恐れていた。他人は何を考えているのだろうか、自分ひとり全く変わっているのでは、と不安と恐怖におそわれていったという。そこで彼がとった行動は道化だ。それは彼の人間に対する最後の求愛であった。自分の言葉、表情、行動を全てを偽ることで、わずかに人間とつながる事が出来た。内心、必死で、いつばれてしまおうかという不安におそわれていたが、他

の人が笑つものを見てやめられなくなっていた。

他の人は自分をどう思っているのだろうか。もっと自分を良く見せたい。というのは、皆が思っていることではないのだろうか。その思いから私は二種類の行動パターンがあると考えた。

一つ目は、葉蔵と同じように自分を偽って自分を理想に近づけていくパターンだ。これは、相手が受けとる自分の印象は良くなるが不安などでストレスがたまる可能性がある。

二つ目は、本当の自分を他の人に伝えて、自分の本性を知ってもらうパターンだ。これは、相手に素の自分をわかってもらい、相手と接しやすくなった、気が楽になる。

私は、この二つを比べた時、二つ目の方が断然良いと思った。なぜなら、二つ目は葉蔵のように、やめることができなくなってしまうかもしれないからだ。そして、その内、元の自分を忘れてしまふ気がする。それなら、素の自分を知ってもらった方が良いと感じた。

美術学校の画学生になった葉蔵は、同じ画学生「堀木正雄」と出会う。葉蔵は正雄から酒と煙草と淫売婦を教わる。最初は正雄につき合う程度だったが、次第に自分でもするようになっていった。それは、人間恐怖を一時でも、まぎらわす事ができるからだ。それを知ってしまった葉蔵は、自分の持ち物を質屋に入れてまで、お金をつくるようになった。悔いる気持ちも抱くことさえなかった。

ある日、酒におぼれていた葉蔵は、酒

よりは良いと言われ、モルヒネをもらった。久しぶりにアルコールからぬけだせると、何のためらいもなく使ってしまったのだ。ただ、酒より良いわけがない。モルヒネは「麻薬」だ。一日一回のつもりが二回になり、四回になった頃には、それが無ければ、仕事ができなくなっていた。それはもう中毒者と言っている。それから葉蔵は狂人のようになり、とある脳病棟に入れられてしまった。

この後、葉蔵がどうなったのかはわからないが、葉などに頼らずに、自分と向き合っていくのではないだろうか。「人間失格」という本は、葉蔵を通して、苦難から逃れ、忘れない、という人間の本性というか性質を伝えているのではないかと思う。そして、私は、この性質と向き合い、あらがっていかなければいけないと深く感じた。

書名「人間失格」

大宰 治 著

(寸評) 本を読んだ感想だけにとどまらず、人間の本性に鋭く迫る考察が書かれていることが、読み手に大きなインパクトを与えます。これは、中学生とは思えないほど鋭く、人が生きていくことの本質に迫った内容だったのが印象に残りました。作品の舞台となっているのは、昭和の初頭ではありますが、神田君の感想文からは、現代社会に生きる我々に対しても、自分の人生を考え直すきっかけを作ってくれるような内容の文章でした。

## 高校生の部 最優秀賞

### 二年生になって

弟子屈高校2年 佐々木 愛さん



私が今回読んだ本は、古生物学者である佐藤たまきさんの『フタバスズキリュウ もう一つの物語』という本だ。だが、この本はフタバスズキリュウについてが書いてある訳ではなく、たまきさんの研究の苦労や、古生物学者になるまでの苦労が多く語られている。

小さい頃の夢、が大人になってそのまま叶っている方は少ないと思う。大きくなるにつれて「少し無理かな」「何になるのか」と考え、変わってしまう人が多いと思うし、私もそうだ。だが、たまきさんは幼稚園の頃から古生物学者という夢を持ち続け、叶えた方だ。私は、勉強というテーマを持ってこの本を読んだ。

高校二年生になって一番私の中で変わったことは、進路や勉強について考えることが多くなったことだと思う。たまきさんは東京大学教養学部理科Ⅱ類に入学したが、小学校高学年から大学入学まで、生活の中心は受験であったという。本格的に考えなければならなくなってきた今、こういう話をみるとやる気が出るし、東大である、ということころにも惹かれた。

テレビで東大生を見かける機会が多くなり、頭の良い人が以前より身近になったことで、私は勉強に興味を持つたと思う。このタイミングでそう思えたことはとても運が良いと思うし、楽しんで勉強できている。なのでたまきさんの体験記は私にとってとても格好良く映り、入学したあとの話がとても気になった。

勉強という事に絞ってこの本をまとめる時、たまきさんは自発的に行動し、接点を持って論文をまとめていた。高校では論文に馴染みがなくあまりリイメーシを持って読むことはできなかったが、大学では「好きなこと」を学べる、というリイメーシを持つことができた。この後たまきさんはアメリカへ留学するが、そこで留年をしてしまう。先程「自発的に」と書いたが、たまきさんの留年の理由は日本とアメリカの制度の違いであった。自発的な行動が求められる分、先生側から全てサポートが得られる訳ではない。大学では好きなことが学べるが、それには自分で責任を負わなければいけない、ということも学べたと思う。

この本を最後まで読んでみて、私はこの留年というところまでが強く印象に残っている。彼女は留年後の一年を振り返って、「研究に集中でき、古生物学者としては濃い期間だった」と話すが、当時は好きなことで留年したという挫折感や、金銭的な不安が大きかったという。

この夏休みにこの本を読めたということは、私の進路活動に大きな影響を

与えると思う。苦労というのをこまごま具体的に知れたのは進路に限らず色々な場面で用意ができると思うし、今までの本と違う系統のものを読んで、勉強に対する考え方、将来のイメージがついた。

始めの方で夢について触れたが、私に明確な夢はない。だが、焦って見つけるものではないと思うし、少しだが心構えができたことによって、将来のために努力をすることの大切さを実感できた。好きなこと、やりたいことを仕事にするために、自発的に、責任を持っていろいろなものに触れて世界を広げたいと思う。

書名「フタバスズキリュウ

もうひとつの物語」 佐藤 たまき 著

(寸評) 「本を読んで得た知識や思いを、自分の経験や感情に落とし込む」ということは読書感想文の定石である。落とし込むだけなら話は単純だが、問題は、様々なそれがどれほど人生の「糧」になるか、ということである。佐々木さんの心に残ったこの物語が、今後の人生にも足跡として残っていくことであろう。壁にぶつかっても留年しても、諦めずに奮闘した著者の真諦から、佐々木さんの人生における「糧」を獲得することを願ってやまない。

※生徒の学年は、コンクールが行われた令和元年度当時のものです。